

稲作の伝来

はじめに

日本列島に稲作栽培が開始された時期に関して、現在、弥生時代当初にはじめられたと考えるものと、縄文時代に遡って稲作栽培が営まれたという二つの説が提起されている。縄文時代に稲作が行われていたとする想定は、穀物それ自体の検出と土器に付着した圧痕を手懸りとしてその時期を縄文時代後期に比定する考えと、植物の機動細胞の存在から縄文時代早期（約一万二千年前）には既に稲作栽培が行われていたとする考えに分けることができる。イネのプラント・オパールは80~10ミクロンと極めて小さいために、雨水とともに地下に浸透する可能性があり、また春先には黄砂とともに西日本には飛来することも考えられことから、コンタミネーションを想起する必要がある、イネのプラント・オパールが検出されることだけで、稲作栽培の存在を主張するための確実な証拠とすることはできない。

日本へのイネの伝来ルートについては現在、①農学者や民俗学者が提起する台湾と琉球列島を経由してきたとする説、②民族学者が想起する東中国海を横断して直接九州にもたらされたとする説、③考古学者と一部の農学者が主張する山東半島~朝鮮半島を経て日本列島に到来したとする説が展開されている。これまでに遺跡出土品から当時の東アジアで栽培されていた穀物の種類を見てゆくと、紀元前500年頃の弥生時代当初に稲作栽培が開始されたとする説に立てば、①のルートでは栽培穀物の種類は、イネとアワの組み合わせとなり、②説ではイネのみ、③の説ではイネ、オオムギ、アワ、アズキ、モロコシなどが組み合わせられて栽培されていたことが知られる（甲元 1999a）。従って縄文時代から弥生時代の遺跡で何の穀物が栽培されていたかを知ることが、この問題解決の重要な手懸りを与えてくれることとなる。

1. 縄文・弥生時代の栽培食物

縄文時代や弥生時代の日本列島で検出された栽培穀物の集成によると（寺沢・寺沢，1981，宮本，2000，pp.118-119，甲元他，2000，pp.18-185）、イネ、オオムギ、コムギ、アワ、アズキ、ヒエなどがある。このうち縄文時代に遡ってその存在が確実に知られるのは、イネ、オオムギ、アズキ、アワであり、従来リョクトウと鑑定されたものはヤブツルアズキという自生の豆であることが分かってきた。これを除外しても縄文時代段階では稲作を含めた複合的な農耕栽培が行われていたことになる。

これら栽培穀物の所属する年代は縄文時代後期から晩期にかけてであり、土器に付着した資料とも符合する。従って紀元前二千年紀以降にはイネを含めた複合的な農耕栽培が営まれていたことは確実であると言える。

弥生時代前期に検出される穀物もイネ以外にオオムギ、コムギ、キビ、ダイズ、ソバ、ヒエ、アワ、アズキなど各種に及んでいる。また栽培された植物にはモモ、ウメ、ヒョウタン、ナス、

ウリ類、アサ、ゴボウなどと広範囲に達している。これらイネ以外の栽培食物は中国の新石器時代に多く認められるものばかりであるが、中国の中でも黄河流域以北の畑作地帯で栽培された種と共通するものが大部分を占めていることは極めて注目される（甲元 2001）。

韓国の新石器時代から青銅器時代にかけて見られる栽培穀物には、イネ以外に、キビ、アズキ、ダイズ、モロコシ、アワ、オオムギ、コムギ、ヒエ、エンバクなどがあり、モモも検出されていて（Shim 2000、甲元 2000）、日本の縄文時代から弥生時代にかけて栽培された穀物とほとんど変わるところはない。

以上栽培された食物の品目の組み合わせからみると、日本の初期農耕文化が韓国の新石器時代から青銅器時代の農耕文化と密接な関連のもとに営まれたことを明白に窺うことができる。

2. 家畜飼育の問題

オリエントの出現した畑作農耕にはヒツジ・ヤギ、ウシなどの家畜動物が食料上では重要な地位を占めていることが明らかである（Murray 1970）。また東アジアにおいても水稻耕作地帯や畑作耕作地帯でもブタが一定の割合で飼育されていた（甲元 2001）。しかし日本の初期農耕文化においては家畜飼育は見られず、祭祀のためのイノシシやシカの一時的飼育 keeping は認められるものの、極めて限定された性格のものであったこと（甲元・山崎 1984）、ひいては近代に至るまで、肉食用としての家畜飼育は行われていなかったというのがこれまでの通説であった。

ところが、奈良県唐古遺跡や大阪府池上遺跡の動物骨を分析した金子浩昌は、従来イノシシとして扱われていた動物の年齢が2才以下のものが出土個体数の大部分を占めることから、ブタ飼育が行われていた可能性を示唆した（大阪府埋蔵文化財センター 1980）。また西本豊弘は大分県下郡桑苗遺跡、佐賀県吉野ヶ里遺跡、菜畑遺跡、愛知県朝日貝塚などの大規模な弥生集落で発見される「イノシシ」には歯槽膿漏が観察されること、頭骨の形態が従来の縄文時代遺跡で発掘されるものとは異なることなどを指摘して、弥生時代に入り稲作農耕の開始と共に、新種の「ブタ」が将来されたとの論を提示したことから（西本 1993）、弥生時代から古代にかけては一定程度の家畜飼育が行われていたとする主張が展開されるに至った（佐原 1996）。

最近縄文時代から弥生時代にかけての遺跡で検出されるイノシシのDNA分析が行われた結果、遺伝学的にはニホンイノシシそのものであり、水稻耕作に伴って大陸から家畜ブタが移入されたのではないことが判明したのである（小沢 2000）。イノシシとブタは「種」は同じであり交配も可能なことから、弥生人による動物の扱いの問題に帰すことができることを物語るものであり、遺跡によってはイノシシの一時的保有から、初源的な家畜飼育まで多様な動物の取り扱いが行われていたことを示すものである。

マードックの統計資料によると、穀物栽培が高い水準にある民族では、家畜飼育が活発ではないことが指摘され（Murdock 1967）、新石器時代の中国においても水稻耕作が盛んな長江流域では水稻耕作が高まりを見せることに比例してブタ飼育が低下してゆくことが明らかにされ

ている（甲元 1992年）。また東北アジアの初期農耕文化段階でも、畑作栽培が行われている北方地帯ではブタ飼育が一定程度行われるのに対して、韓国南部の稲作栽培が営まれた地域ではブタの存在が確認されていないことを考慮すると（甲元 1991）、弥生時代にあつては特殊な事例を除いては、家畜飼育は一般的ではなかったことが想定される。

3. 水稲栽培の系譜

以上栽培穀物や家畜動物の飼育が活発でなかったという点において、日本列島に展開した初期農耕文化は韓国を含めた東北アジアと密接な関連をもって形成されたことが窺える。日本は大陸から切り離された海中に存在する島国であるために、大陸との交渉にあたっては漁撈民の介在なくしては、不可能であることは言うまでもない。

九州地方と韓半島とのつながりが明確になるのは、縄文時代前期のことであり、佐賀県腰岳産の黒曜石が韓国南部の東三洞貝塚（Sample 1974）などをはじめとする遺跡から発見されている。

縄文時代前期ころの九州と韓国南部地域で共通する漁撈具には、結合式釣針と石製銚頭があり、縄文時代後期には結合式釣針、組合せ銚、回転式離頭銚、逆 T 字形釣針などがみられる。単式釣針は大きさが 6 cm 以下と極めて小さい種類であり、大型を主体とする東日本の釣針とは異なっていて、むしろ韓国南部の釣針の大きさに等しい。

これら漁撈具の中で、結合式釣針、銚（石製銚、組合せ銚）、回転式離頭銚などは韓国南・東海岸地域からロシア領沿海州地域の寒流系漁撈具と共通するものであり、海獣類や大型魚類を捕獲するためのものであったと推定されている。一方逆 T 字形釣針は山東半島や遼東半島、それに韓国南部沿岸地域と西北九州に分布が認められ黄海沿岸地域で共通する漁撈具である。この逆 T 字形釣針は延縄漁撈に使用され、マダイ、クロダイ、スズキなどの沿岸に棲息する魚類を主たる捕獲の対象とするものであった（甲元 1999b）。この逆 T 字形釣針が認められる山東半島や遼東半島ではイネを含めた農耕が営まれていたことは、出土した穀物資料により確かめられているし、韓国南部でも多くの遺跡から様々な種類の栽培穀物が検出されている。またこの逆 T 字形釣針が盛行する時期は紀元前二千年紀であり、遼東半島に稲作栽培の痕跡が認められる最古の時期と符合している（Dalian Institute of Cultural Relics and Archaeology 2000）。このことから、逆 T 字形釣針は稲作栽培を含めた農耕文化と密接に関連することが分かる。縄文時代後期は温暖期に相当し、漁撈活動が活発に展開していた。漁撈具の共通性とその漁撈具を使用する共通する魚類の捕獲という類似点は、黄海沿岸地帯を巡る大きな文化交流があったことを明白に示唆するものであり、日本列島への稲作栽培の登場も、こうした漁撈民の活動に依拠するものであったことは容易に理解されるのである。

おわりに

これまでの考古学的研究によると、稲作栽培を含めた日本列島における初期農耕文化は、縄

文時代後期から弥生時代前期のころに、中国東北南部と韓国と密接に関連して形成されたことが判明している。しかし農耕文化の形成にあたっては決して一度の波及により成し遂げられたものではなく、穀物栽培は紀元前二千年紀から一千年紀にかけて、1000年以上の長期間にわたる密接な交流の結果として出現するものであり、今後はその折々の農耕文化波及のメカニズムを多方面から具体的に検証することが望まれるのである。

引用文献

日本語

- 大阪府埋蔵文化財センター 1980 『四ッ池・池上』
- 小沢智生 2000 「縄文・弥生時代に豚は飼われていたか」『季刊考古学』73号
- 甲元眞之 1991 東北アジアの初期農耕文化 『日本における初期弥生文化の成立』
- 1999a 東アジア先史時代穀物出土遺跡地名表 甲元眞之編『東中国海沿岸地域の先史文化』第2編、熊本大学、1999年。
- 1999b 環東中国海の先史漁撈文化 『熊本大学文学部論叢』65号
- 2000 東アジア先史時代遺跡出土植物遺存体集成 甲元眞之編『東中国海沿岸地域の先史文化』第3編、熊本大学
- 2001 『中国新石器時代の生業と文化』中国書店
- 甲元眞之・山崎純男 1984 『弥生時代の知識』東京美術
- 佐原真 1996 『食の考古学』東京大学出版会
- 寺沢薫・寺沢知子 1981年 弥生時代植物食料の基礎的研究 『橿原考古学研究所紀要』5集、
- 西本豊弘 1993 弥生時代ブタの形質について 『国立歴史民俗博物館研究報告』50集
- 宮本一夫 2000 縄文農耕と縄文社会 佐原真・都出比呂志編『古代史の論点』第1巻、小学館

英語

- Chim Bong-keum 2000 List of Botanical Remains in Prehistoric Korea. KOMOTO ed. *Prehistoric Cultures of the Circum East China Sea Area. Part3*
- Dalian Institute of Cultural Relics and Archaeology 2000
The Dazuzi Bronze Age Archaeological Site.
- Murray, J. 1970 *The First European Agriculture.* Edinburg University Press.
- Murdock, J. P. 1967 *Ethnographic Atlas. Ethnology.* Vol.6
- Sample, 1974 *Tongsamdong A Contribution to Korean Neolithic Culture History.*
Arctic Anthropology. Vol. 11, No. 2
- ドイツで開催された日本先史時代展の解説 2004年から2005年。